

映画『妻の病ーレビー小体型認知症ー』プレスリリース

妻の病

ーレビー小体型認知症ー

一人の医師と、認知症の日々を生きる妻との
10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語。

Life is like a Dream, isn't it?

「生きなきゃ…
ふたりでよう頑張ったと思う。」
「うん、生きなきゃ。」

(ヒューマンドキュメンタリー映画)

伊勢 真一 演出作品

製作/いせフィルム <http://www.isefilm.com/>



2014年/カラー/1時間27分



いせフィルム

TEL : 03-3406-9455 FAX : 03-3406-9460 メール : ise-film@rio.odn.ne.jp



愛する人が認知症になったとき、 一体何が大切なのか。

「痴呆」から「認知症」へと呼び名が改められ、
社会の認識が変わりつつあるといわれて10年あまりが経ちます。
けれども、まだまだ「認知症」への“誤解”や“偏見”、
そして、“あきらめ”がはびこっているのが現状です。

映画『妻の病 -レビー小体型認知症-』は、
そういった状況の中で、悪戦苦闘しながら生きている
「認知症」の患者本人と、家族やケアする人たちの日々を追った
ひとつのケーススタディです。

主人公は、四国・南国市に暮らす、石本浩市・弥生夫妻。
今なお正確な情報が少ない「認知症」のひとつ、
「レビー小体型認知症」と向き合い、
石本夫妻が手を取り合って、一步一步を大切に歩いていく姿が描かれます。

誰の上にも起きる可能性のある“認知症”という病。
愛する人が認知症になったとき、
あるいは自分自身が認知症になったとき、
何が大切なのか…。

この映画は、一人ひとりに深い問いを投げかけています。

レビー小体型認知症とは

アルツハイマー型認知症、脳血管性認知症とともに、
「三大認知症」といわれている。
パーキンソン症状と幻視・幻聴体験、
そして認知症独特の記憶障害がみられる疾患。
「レビー小体」とよばれる異常物質が脳組織に沈着する。
症状には波があり、うつ症状もみられるため、
同居する家族の精神的負担も大きい。



妻の病

—レビー小体型認知症—



作品概要

一人の医師と、認知症の日々を生きる妻との
10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語

この映画は、認知症のドキュメンタリーというよりも、
ある夫婦の愛の物語だ。

「まるで夢のようだね.....」
認知症の日々を生きる妻に、夫が語りかける。
ふたりはうなずき合う。
この映画は、認知症のドキュメンタリーというよりも、
病を経て絆を深める、ある夫婦の愛の物語である。

———2011年3月11日。

東日本大震災のその日、私はひとりの友人の話聞くために、
高知県南国市にいた。
友人の名は石本浩市（62才）、ふるさとのその地で小児科を開業する医師である。
十数年前、小児がんの子どもたちのキャンプで出会い、
10年がかりで『風のかたち』という映画を製作した仲間だ。
その日、石本さんが語ったのは、小児がんの話ではなかった。
“レビー小体型認知症”それが、彼の妻の病名だった。

妻・石本弥生さんは、石本さんとは幼なじみ。
50代から若年性の認知症となり、10年間、石本夫妻は病との闘いに明け暮れて来た。
小児がん治療と地域医療の取り組み、妻・弥生さんの認知症との格闘、
決してきれいごとでは片付けられない日々.....。
石本さんは、医師ならではの観察眼で、弥生さんの発症以来の日常を、
まるでカルテを書くように、こと細かに記録していた。

認知症が進行し、今では身の回りのことがほとんど何も出来なくなった弥生さん.....。
その弥生さんに深い愛情を寄せケアする石本さん、家族、親戚、地域の人々。
映画『妻の病—レビー小体型認知症—』は、
四国・南国市の豊かな自然に生まれ、支え合うように生きて来た一人の医師と、
認知症の日々を生きる妻との、10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語である。

「生きなきゃ.....。ふたりで、よう頑張ったと思う」
「うん、生きなきゃ」

伊勢 真一

(映画『妻の病—レビー小体型認知症—』監督)



主人公.....

石本 浩市 (いしもと・こういち)

小児科医



「僕が彼女を見てるようで、
彼女は僕のことを鋭く見てるわけよね。」(浩市)

1951年高知県南国市生まれ。
野球少年だった少年時代を経て、
土佐中・高等学校を卒業。
医師を志し、順天堂大学医学部を卒業。
小児科医となる。
小児がん医療に取り組み、最前線で活躍。
小児がんの子どもたちのためのキャンプを、
細谷亮太医師・月本一郎医師と共に立ち上げた。
2001年、故郷・南国市へ戻り
「あけぼの小児クリニック」を開業。
地域医療に取り組み、現在に至る。

石本 弥生 (いしもと・やよい)

石本浩市さんの妻

1951年高知県南国市生まれ。
石本浩市さんとは幼なじみ。
2004年に統合失調症と診断される。
その3年後、
若年性のレビー小体型認知症であることが判明、
現在に至る。



「何があったらうね、私は？」(弥生)

妻の病

—レビー小体型認知症—



映画『妻の病 —レビー小体型認知症—』に 寄せられたご感想

すごかった。感動です。想像以上。
言葉にできませんが、笑っていきよう、
と思いました。

(50代・女性 役者)

人生はスリリングなタンゴのダンスのようです。
パートナーを信じて、くるくると。
極上の「愛情物語」でした。

(50代・女性)

「共感」のできる心が何よりの介護、
というお話が印象に残りました。
ご夫妻のお姿が、それを物語っておられました。
相手の中に入って世界を見る心を
持てるようにと自分に言いかけました。

(40代・女性 主婦)

レビー小体型認知症に身近な人がなってしまった時、
医師としての見方や夫としての見方が、
最初の時期には混在し、
時を経るにつれて、夫、
さらには恋人のように変化していったように感じ、
まさしくラブロマンスのようであったと思う。
認知症という題材を扱った映画でありながら、
認知症が主役ではなく、
人と人のつながりが主役であったと思う。

(20代・男性 学生)

石本先生の患者に寄り添う姿は一貫していて、
奥様に対しても、同様なのだなと感動しました。
「あの時は、こんな日が来るとは思わなかった。
でも、生きなきゃ！」
という言葉が、心に残りました。
人生に対する力強い言葉でした。

(40代・女性 会社員)

病というのは、それに関わる人間に、
生きるうえで、最も大切なことは何かを
教えてくれる体験なのか、と思いました。

(60代・男性)



妻の病

—レビー小体型認知症—



スタッフ.....

映画『妻の病 —レビー小体型認知症—』

2014年／カラー／87分／ハイビジョン

出演／石本浩市 石本弥生 石川真理
南国市・香南市・香美市のみなさん

題字／細谷亮太

撮影／石倉隆二

音響／米山靖

録音／渡辺丈彦

照明／工藤和雄

編集技術／尾尻弘一

整音助手／井上久美子

バンドネオン／大久保かおり

コントラバス／カイドー ユタカ

音楽協力／横内丙午

宣伝デザイン／森岡寛貴 (ジオングラフィック)

制作・上映デスク／遠藤郁美 鷲見真弓 増馬則子

協力／あけぼの小児クリニック

デイサービス 「きとうせや」

日章小学校

スマートムンストーン

制作協力／ヒポコミュニケーションズ

一隅社

ハチプロダクション

上映協力／MOCプロジェクト

助成／文化庁文化芸術振興費補助金

企画・製作／いせフィルム

演出／伊勢真一



演出・伊勢 真一 (いせ・しんいち)

映像作家

1949年東京生まれ。

『奈緒ちゃん』『えんどこ』から『風のかたち』

『大丈夫。』などまで、長年にわたり

ヒューマンドキュメンタリー映画を中心に製作。

様々な人の日常を温かい眼差しでほのぼのと映し出す

作風で知られる。近作は『傍（かたわら）～3月11日

からの旅～』（12）、『小屋番 瀬沢ヒュッテの四

季』（13）、『シバ 縄文犬のゆめ』（13）など。

2013年「日本映画ペンクラブ功労賞」受賞。

翌年2014年には「シネマ夢倶楽部賞」を受賞。

妻の病

—レビー小体型認知症—



上映について.....

伊勢真一監督のヒューマンドキュメンタリー映画は、自主製作の処女作『奈緒ちゃん』（1995年）以来、20余年にわたり全国各地の様々な地域で、主に自主上映会によって観られてきました。

“映画は観客と出会い、はじめて映画になる.....”

という考えをモットーに、上映活動に取り組んでいます。

映画『妻の病 —レビー小体型認知症—』も、自主上映を募り、上映の輪を広げたいと考えています。



映画『妻の病 —レビー小体型認知症—』

2014年／カラー／87分／ハイビジョン
16:9 HDV・DVカム・ブルーレイ・DVD

妻の病

—レビー小体型認知症—



《お問合せ先》

いせフィルム

<http://www.isefilm.com/>

TEL:03-3406-9455 / FAX:03-3406-9460

E-MAIL:ise-film@rio.odn.ne.jp